
花言葉は

笹熊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花言葉は

【コード】

N0335E

【作者名】

笹熊

【あらすじ】

この話は、花言葉を使った恋愛物語です。切ない恋の花。甘い恋の花。苦しい恋の花……。あなたはどの花を選びますか？一話ごとくに完結します。

第一本　く勿忘草く

わすれなくさ
勿忘草の花言葉は

『わたしを忘れないで』 『真心の愛』

それは暑い暑い真夏の日。

私の名前は虎岸とらぎしすみれ　14歳　女の子です。

今、私は学校の校門の前で人を待っています。この暑い中もつ20分も待つてます。

（あー何か頭がボーっとしてきた）

暑すぎて頭がボーっとする。周りの木や家が熱でギラギラゆらいでいる。

暑いせいか歩いている人も少ない。車も通らない。セミの泣き声だけが聞こえている。

「・・・い・・・おい・・・」

そんななか人の声が聞こえた。声のした方を向くと、そこには私が待つていた大好きな人。

「衛まてお!!!」

私は急いで衛の所へかけよる。

「遅かったじゃん!!!」

「ああ!? 遅いつて・・・今、待ち合わせの時間ちよつきりじゃねーか」

「でも!・・・普通もつと早く来るじゃん」

私が一人で怒つてると衛は、困った様に笑って「暑いから早く行くぞ」と言った。

「そうだね」

何かニコニコ笑ってる衛を見ると、あんな事で怒っている自分が

バカみたいに思えてきた。

きつと暑すぎて頭がどうかしたんだと思う。

二人で並んで歩く。

この人は三村衛^{みつむらゐ} 15歳 彼氏。付き合い始めてから3週間ちょっと。今日は楽しみにしていたデートの日。

行く場所は水族館。

歩いてそんなに時間がかからない所にある。

「ねえ、衛そんなに着てあつくはないの？」

さつきから気になっていた。衛はこんなに暑いのに、ジーパンをはいて上にはパーカーを着て

頭にはキャップのぼうしをかぶっている。

「ん？ああ。暑いけど俺、日光湿疹ひどいんだ。」

「えっ！！そうだったの！！」

「まあな。」

衛はへらへら笑いながら言ってるけど・・・

「早く行こう！早く！！」

知らなかった。そんな事一言もきいてない。

私は衛の手を握って走り出した。きつとすごく苦しいに決まってる。いくらきつちり服を着ていたって日に当たってしまうところはあ

私たちはそのまま走って水族館に駆け込んだ。

「ハアっハアっハアっ」

全力で走ったせいで二人とも息を切らして、汗だくになっている。

「ハアっこんなに走らなくても少しくらいなら大丈夫なのに」

「うつつでも・・・ハアハア」

「まあいいけどよ。それより喉渴いたな。何か買って飲もうぜ」

「うんそうだね」

とりあえず自動販売機で何か飲み物を買う事にした。

「何がいい？」

「ごそごそとお金を出す衛。」

「えっ！？買ってくれるの！？」

「ん？だから今日は財布持ってこなくていいっていったろ？」
ニコリと微笑んで言う衛。
ドキッ

(つつ／＼そう言うの反則だよ／＼)
顔が赤くなつてないか心配だ。衛といると心臓が休まらない。いつもドキドキしてる。

「どうした？」
「え？！う、ううん。なんでもない。私お茶でいいや」
「ん？そうかわかった」

(あ、あせつたあ／＼／＼)
だって気づいたら、衛は私の顔を覗き込んでいて、顔がすごく近くにあったから。

衛は自分のと私のを買って、お茶を私にくれた。

「なあ。クマノミ見に行こうぜ。俺好きなんだ」

「うん。いいよ」
ドキドキしてるのがおさまっていく。

水族館の中は薄暗く、ヒンヤリとしていて気持ちいい。まるで別の世界みたい。人もあまりいなくて静かだ。

「あつ。衛、クマノミあつちだよ」

「あつ本当だ」

「小さくてかわいいね」

「そうだな。でも、このイソギンチャクといつしよに居るのがいいんだよ」

「そう？私はクマノミだけでもいいと思うけど・・・」
私がそう言うのと衛はクマノミはイソギンチャクと居なきゃダメなんだって真剣な顔で言った。

「そうだよ。イソギンチャクがいつしよだからいいんだよ」
「うん」

(本当に変なところでこだわるんだから)
それから少ししてイルカを見に行く事にした。これからイルカショー

ーが始まる。

行く間にも色々な魚を見た。

エンゼルフィッシュとか、サメとか、亀とか、あと名前はわからないけど色々な熱帯魚とか、深海魚。

(?!?!???)

歩いてると、ふっと手に暖かい感触。

衛を見ると、ニコニコ笑って「別にいいだろ？」

て言った。

(-----)

いい。いいけど恥ずかしい。だってこんなところで手を繋ぐなんて・

自分でも顔に熱が集まるのがわかって、うつむいてしまった。

(いきなりこういう事するのやめてよねっ／＼)

本当にいきなりなのだ。こんなだったら心臓がいくつあってもた
りない。

そのまま会場まで行って。そのままイルカショーを見た。手を繋い
だまま。

「おお！すみれ！！見たか今の、すげーな。どうやってあんなに高
く飛ぶんだろうな」

「本当。すごいね」

小さい子供みたくにはしゃぐ衛を見ていると、笑ってしまう。何か
心が癒される。

ザバーン！！大きな音をたててイルカが飛ぶ。その度に衛は「おお
！」って声を上げる。

ずっと。ずっと。永遠にこんな時間が続けばいいと思った。ずっと・
。。。

イルカショーも終わって、その後もアザラシとかの海獣ショーも見
た。

「楽しかったね。」

「そうだな。イルカのショーもすごかったけど、やっぱりクマノミ

「がかわいかったな。イソギンチャクと」

「やっぱり、クマノミなんだ・・・」

「ん？何かいったか？」

「ううん。なんでも」

私がボソリと言った言葉は聞こえなかったらしい。それもおかしくて、おもわず笑ってしまった。

クスクス笑う私を不思議そうに見ている衛。そんな衛に帰ろうかと声をかけて歩き出す。

外に出ると大分涼しくなっていて、空はオレンジ色に染まっていた。歩いてると、突然衛は歩くのを止めてしまった。

私がどうしたの？て聞く前に衛は

「ちよつと待つてて」

と言つて、あれから、ずっと繋いでいた手を離して、目の前にある小さな家に入つていった。

「なんなのよ」

(まったく本当に何するにもいきなりなんだから)

一人置いていかれた私は不機嫌。でも一応待つててと言われたので、ブロック塀によしかかつて、待つ事にした。

(そろそろ髪、切らないとなあ)

暇な私は肩まで伸びてしまった髪をいじりながら、そんな事を考えていた。

衛はそんなにしないで、帰ってきた。

「ごめんなあ」

衛の事を怒鳴つてやろうと顔をあげる。

(！！！！)

「はい。コレ」

ズイツと私の前に押し付けられるのは、大きな花束。

「何・・・？コレ」

「すみれにやるよ。」

私は押し付けられていった花束を受け取る。

「何なの？この花？」

蒼くて綺麗な花。

「これな、勿忘草って言うんだ」

「勿忘草？」

「そう。勿忘草」

(……!!えっ!!)

いきなり衛に抱きしめられる。持っている花束がガサリと音をたてる。

「勿忘草の花言葉は『私を忘れないで』と『真心の愛』なんだ。」
顔を上げると真剣な顔の衛と目が合う。

ドキッドキッドキッ

心拍数が上がっていく。顔も熱くなっていく。

「愛してる。すみれ」

(……!!)

唇にあたるやわらかい感触。

キスされた。

時間が止まったような。そんな感じがする。いつもキスなんてしないから。

重なっていた唇はすぐに離れた。

「何考えてるの。ここ外だよ」

「ははは」

私が睨んで言うと衛は笑った。

その時の衛の顔が赤かったのは夕日のせいなんかじゃなかったと思う。

「帰るか」

「うん」

あれから3日がたった。いつもの変わらない日々。

ジリリリリリリリリリリ

一本の電話が鳴った。

「すみねー。出てちょうだい」

「はい」

私は急いで茶の間にある電話を取った。

「はい虎岸ですけど・・・」

.....

ガシャーン

「すみね!?!どうかしたの」

大きな音に母がおどろいて台所から出てくる。

でも、でも。

今の私には電話が落ちた音も、母の声も耳に届かなかった。

(衛っ衛っ。まもるっ。)

家にかかってくる一本の電話。それは、三村 衛が交通事故で意識不明の重体だという知らせ。今近くの病院にいるらしい。

私は全力で走った。

「衛。お願い。無事でいて」

私は病院に入ると、衛の病室に急いで走った。途中で看護士さんに注意されたかもしれない。

「衛っっ」

病室に入ると、衛の家族が居て泣いていた。

家族の人は私に気づくとコッチに来て下さい。とベットの横を開けてくれた。

固まってる私に衛のお母さんが説明してくれた。

衛はまだ生きているけど、もう助からなくて。

交通事故の原因は車が、いきなり歩道に突っ込んできたらしい。

家族の方は私を気づかってか、衛と二人きりにしてくれた。

「まも・・・る?」

そつと頬に触れる。あるのはかすり傷で目だった大きな傷はない。

「うそ・・・死ぬなんてゆるさないよ・・・っっ」

声に出した瞬間、こらえていた物が瞳から水になって、あふれ出す。

一度出だしたものは止まらなくなつて。衛と居た時間が頭の中をよぎる。

衛の笑顔が、感触が、声が……

まるで本物のように「すみれ」て……本物のように……

「す……みれ……」

「えっ!!」

かすれているけど、それは衛の声。

顔を上げると、微笑んでいる衛がいた。

「良かった！もう本当に死んじゃうかと思つた!!」

私がそう言つと衛は悲しそうに笑つて首を横に降つた。

「え??」

「もうダメなんだ」

「衛・なに言つて……」

「自分のことは、わかるよ。もうダメなんだ。」

「そんなこゝすみれ」

私の言葉は衛によつて止められた。これは何も言つなつてこと。

そして衛は私の手をそつと握る。

わたしもその手を両手で握り返す。

「すみれ。忘れないでくれ。何年たつても、新しい彼氏ができても・

・三村 衛が……いた……事……俺……が……すみれを……本気で・

・愛……した……こ……と」

衛はそれだけ言つと静かに目を閉じた。

ピ—————

病室に響く高い音。動かなくなつた衛の体。

こうしてみると本当に、眠つていただけのよう。

「忘れるわけ……ないじゃない!!……バカっ……ばかあ……」

本当にいつつも勝手に・・・私がいくら迷惑・・・したと・・・思っ
て・・・
「

その後、衛の机にあった私宛の手紙。手紙には押し花になった勿忘
草が入っていた。

すみれへ

今俺は15歳です。今からこんな書くのはおかしいと思うけど、
何年たても俺の気持ちは、変わらないと思うから。

コレを読むすみれが何歳かはわからないけど、俺が死んだ後でしよ
う。

俺が言いたい事は、ただ一つです。

俺を忘れないでください。愛しています。何年たっても・・・。

机の上にある勿忘草

私は一生あなたを忘れません

勿忘草の 花言葉は

『私を忘れないで』 『真心の愛』

第一本 く勿忘草く（後書き）

読んでくれて、ありがとうございました。

第二本 くイカリソウ

イカリソウの花言葉は

『貴方をはなさない』

俺は、赤井勇真 あかい ゆしま 13歳 中学2年 牡牛座。

部屋の窓からポーツと青い空をながめる。今は4月、花も虫もみんな元気になつていく時期だ。

でも今の俺はそんなに元気じゃない。

最近彼女の麻美 まみが冷たいんだ。ショートカットの黒い髪に黒い目のクラスでも可愛い方の女子。

話しかけても無視される……。目も合わそうとしない。

別に何も特別なことをした覚えはないのだが。

もうかれこれ1週間は、話していないし……。何かあつたら言ってくればいいのに……。

麻美とは去年同じクラスになつて、俺から告白した。その時は麻美すごく喜んでくれて……。「私も前から好きだった」て……。

「はあああ、学校行くかなあ」

知らず知らずのうちに出てしまつたため息。このごろの勉強なんて全然頭に入っていない。麻美の事が気になつてしょうがないのだ。

それでも学校には行かなくてはいけない。

俺はもう一度ため息をついて家を出た。空は悲しいほどに雲一つない晴天だ。周りに人はいなくてすごい静か……。

歩いて10分ほどで学校についた。

(!!!麻美)

教室に着くと友達と楽しそうに話す麻美の姿。

「あの……麻美……」

「みんな！あっちの方行こうよ。此処日が当たって暑いしさ」
俺が麻美の近くに行って話しかけようとする。麻美は俺を無視して友達と廊下の方へ行ってしまった。

俺がその場に出っ立っていると、友達の明あかりが話しかけてきた。

「おい。もうあきらめろよ。お前、完全に無視されてるぜ。きつと嫌われてるんだよ。だいたいあんなに可愛い女子が、お前なんかと本気で付き合うかよ」

明はそう言っ俺の肩をポンポンとたたく。その顔はどこか嬉しそうだ。

(このやろう。完全に喜んでいる)

もともと明は俺と麻美が付き合うのに反対だったのだ。

「そうかもな。」

キーンコーンカーンコーン

一時間目のチャイムが鳴った。それから、二時間目、三時間目、四時間目、給食、五時間目も

終わった。

けつきよく今日も俺と麻美はたいして話さなかった。

「勇真、いっしょに帰ろうぜ」

「あ、いや。今日は一人で帰るわ。」

「ん？そうか？」

俺が断ると明は他の友達の所に走っていった。

すぐに家に帰る気にもなれず、ボーっとその辺をブラブラと歩いていると、一人の茶髪の女子がいた。彼女は俺を見つけると近づいてきた。

「小野おの?どうしたんだ？」

小野は、麻美といつもいっしょにいる友達だ。小野はかけている眼鏡をクイツと上げると俺を睨んできた。

「何だよ……」

「勇真。あんた何、考えてるの？いつもヘラヘラして。麻美がどんな思いしてると思ってるの？」

「どんなって。俺が何したっていうんだよ。」

俺がそう言つと小野は、目を大きく開けて、ハ？というような顔をした。が今度は首を横にふつて、あきれたというような顔をした。

「あんだねえ。女つていうのは、繊細なのよ。あんたが他の女に誰でも気がある。みたいな態度して。他の女と買い物とか行ったりして・・・。麻美はてつきり捨てられたと思つて・・・。」

それで、あきらめるのに、もう話さない方がいいって。」

「そ、そうなのか!？」

「それなのに、あんたは、いつも麻美く麻美くって。でどうなの？あんだ麻美の事は、今も好きなの」

小野は腕を組みなおした。何かすごく迫力がある。

「あ、あたりまえだろ。それに、買い物とか行ったりしたけど、あの子は知り合いで・・・。」

俺が、そう言つと、小野はフツと笑つて

「安心したわ。そうなら早く麻美の所行ってきなさいよ。じゃあね」と言つて、走つて何処かに行つてしまった。まるで嵐のようだった。

(麻美・・・)

きっと麻美はつらかつたんだと思う。俺より何倍も・・・何十倍も・・・。

「つつつ」

俺は走り出した。本気で麻美が好きだから。前にテレビでやっていた事を思い出す。感情を伝えるのには花を使うといいつて・・・。

.....

公園。もう暗くなつて空には星が光っている中。ブランコに一人で座る少女。ずいぶん探した。学校にも行つたし麻美の家にも行つた。麻美のいそうな所は全部。

やっと見つけた。俺と麻美が始めてデートした所。

そつと麻美に近づくと、麻美はうつむいていて俺には気がついていない。

毎晩こうしていたのだろうか。それを思えば、本当に俺はヘラヘラしてバカみたいだ。きつと学校のも無理して演技してたんだ。そんなのが分からなかったなんて……。

「麻美……」

そつと麻美の名前を呼ぶと、麻美はそつと顔を上げる。その目には涙が光っていた。

「……！何？どうしたの？こんな時間に……私、そろそろ帰らなくちゃ……」

麻美は俺に気がつくのと急いで立ち去ろうとした。

「……！な、何よ……！」

俺はそんな麻美を後ろから抱きしめる。

「ごめん……ごめん。麻美。ごめん……」

俺が謝ると離れようとしていた麻美が静かになった。麻美を抱きしめる力が自然と強くなる。

「麻美。俺、麻美だけだから」

「……」

何も話さない麻美をクルリと俺の方に向ける。

そして手に持っていた花束を麻美にわたす。急いで、買えるだけ沢山買った花。

イカリソウの花束。

麻美は何も言わない。うつむいているせいで表情もよく見えない。

「もう、離さないから。何があっても……。麻美が俺を嫌いになっても……。もう、絶対に離さないから。この花に誓うよ……」

だか「絶対だよ……！」

（……！？！）

麻美の叫ぶような声で俺の言葉はさえぎられた。顔を上げた麻美。麻美はボロボロと涙をこぼして花束をギュツと抱えなおした。

「絶対。絶対、絶対だよ。」

「うん、絶対もう離したりなんかしないから……」

俺がそう言つと麻美は、さっきとは反対に小さな声で話した。

「嫌われたと思ってっただ。勇真に本当のこときいてれば、良かったのに・・・できなくて・・・勇真と話すのも、顔を合わせるのも怖くて・・・、ごめんね。無視して、私、勇真の事、全然考えなかった・・・。」

話し終わった麻美をもう一度抱きしめて、そつと麻美の唇に口付ける。
「ん・・・」
もう離さない。そんな思いをこめて花束と誓いのキスを君に・・・。

イカリソウの 花言葉は

『貴方をはなさない』

第二本 くイカリソウく（後書き）

こんなめっちゃくちゃな文を最後まで読んでくださった方に感謝です
！！

第三本　　く杜鵑草く

杜鵑草ほととぎすの花言葉は

『永遠にあなたのもの』

12月22日・・・

もうすぐクリスマスで、私の誕生日。

そして・・・貴方が私の前から姿をけした日。

11時40分・・・

私は真つ暗な部屋のベッドの上で窓から月を見ている。

寒い冬の風が窓から入り、私の短い髪を揺らす。

「ねえ。拓夢たくむ・・・早く帰ってきてよ・・・」

ぼそりと言つて目をつむる。

今でも鮮明に蘇る拓夢の　顔　声　匂い

(もう5年か・・・)

「た・く・むー！ー！！早くしないと先に行つちやうよー！ー」

車もあまり通らない道路の上で、離れた所にいる拓夢に叫ぶ。

「おいつつつ樁つつ。何そんなに、はしゃいでんだよっ」

仏頂面をしてノロノロと歩いてる拓夢を私は足を止めて待つ。

今日は私の誕生日。ちょうど15歳のね。
だからなのか、いつもは自分から誘わないデートに、拓夢から誘ってきた。

(もう、何なのさ。自分から誘って来たのに、あの顔は・・・)
なんかいつも以上に顔が不機嫌そうな気がする。

「何ポーっとしてんだ？行くぞ」

「え？あ、うん」

いつの間にかすぐ近くにいた拓夢に手をつかまれる。

顔を見ると耳もとが、ほんのり赤くなっていて、嬉しくなった私はギョツと

手をにぎり返した。

私たちの周りは、みんな雪に埋もれて真っ白で、後ろには二人分の足跡。

何も話さないから。ギョツギョツと歩く音しかしないけどそれが心地よかった。

(拓夢の手って意外と大きいんだなあ。普段は手繋ぐの嫌がるから、あんま繋がらないんだよなあ)

手袋の上からでもわかる大きさに、思わず笑ってしまう。

「何ニヤニヤしてんだよ。気持ち悪いな」

「!!!??につニヤニヤなんかしてないわよ!!!」

ただ、ちよつと笑っただけじゃないノノノ」

私が声を荒げて、そう言うのと拓夢は困ったように笑っただけだった。

(なつなによノノいつもあんま笑わなくせにノノノ)

しばらく歩いてると、拓夢が歩くのを止めた。

「ほらっ着いたぞ」

私たちの目の前には、普通の木製の大きめの家。

「????」

よくわからず、つつ立っていると、拓夢に引っ張られて家の中に入った。

(あれ？今日ってこの先のデパートに行くんじゃないかったけ???)

家の中もほとんどが木製で、いくつかのテーブルとイスがあつて、ところどころに

観葉植物が飾つてあつて喫茶店みたいになつていた。

「え？ちよつと拓夢？どういう事？」

「ああ。まあいいから、座れよ」

そう言われて、近くにあつた席に座らされて、拓夢は私の前に座つた。

すると、小太りの優しそうなおじさんが現れた。

「ご予約なされた佐藤拓夢様でございますね？」

「はい」

「では、すぐにお持ちいたしますので」

そして拓夢とすこし話して奥に入つて行つた。

(・・・？予約？)

「ねえ、ちよ「うまいんだよ」

「はあ??」

私の言葉をさえぎつて、何を言うかと思えば・・・

いきなり「うまいんだよ」って・・・

眉を寄せていると、拓夢は右下に視線をよせて言う。

「ケーキ・・・。ここのチョコレートケーキうまいんだ・・・。

ほら。おまえ好きだろ？」

開いた口がふさがらないとは、このことだろう。

(いつも自分からは何もしない拓夢が、私のために?)

告白してきたのは拓夢からだが、デートに誘つたり色々するのはいつも椿からだった。

「そのつ。椿、今日、誕生日、だろ。

だから、驚かせようと、思って、その、騙したのは、悪かった。けど・・・」

返事がないため怒つていても思ったのか、視線がさらに下がり口調が速くなつてゐる。

「ありがとう」

私が言うと、スツと拓夢の顔が上がって、サアツと赤くなる。

「私すつごく嬉しいよ／＼」

自分でも、これ以上にないくらい笑っているのがわかる。

フワフワとして胸があつたかくて、拓夢も今、私と同じ感じなのかな？

なんて思ってしまう。

「いや／＼別に・・・／＼あつほら、ケーキ来たぞ／＼」

そう言われて拓夢の視線を追うと、小さめの丸いケーキをさっきのおじさんが持ってきて

私の前にそつと置くと小さく礼をして、また奥へと入っていった。

ケーキには15と数字の形をしたろうそくが立っていて、

色とりどりの果物が飾り付けられていて、

ケーキの横には一つの花がおいてあつた。

（杜鵑草？これって・・・花言葉は確か・・・）

「永遠にあなたのもの・・・？」

偶然知っていた花言葉を言うと、赤かった拓夢の顔がさらに、ボンツという

効果音がつきそうなくらい赤くなった。

「な、何で花言葉しつてんだよ／＼」

「拓夢が？「あなたのもの」って？・・・プツ

全然イメージと合わないんだけどー」

「うるせーな／＼とつとと食べよ／＼」

私が笑うと、また目をそらす。

ついていた、ろうそくの火を消して、ケーキ一口食べてみる。

「ん~~~~おいしい~~~~!!」

けっして甘すぎなく、スポンジはやわらかく、すこし酸味がある果物が

なんかもう、すごくおいしい。

二口、三口とケーキを口に運ぶ私を見て、拓夢は

「だろ？」

とってはにかみ

「椿」

「ん？何？」

「誕生日、おめでとう」といった。

何を言っているのか、分からなくなつて、とりあえず

「私のが1歳年上だね」

と言つと。

悔しそうに

「別にまたすぐ追いつくし……」

とつぶやいていた。

その日ケーキを食べ終えた私を拓夢は家まで送ってくれた。

「じゃあ、また学校でね」

と玄関まで私が笑うと帰ろうとしていた拓夢が急にふりかえつて

フワッ

暖かいものに包まれる。

(抱きしめられてる？……私……)

拓夢の心臓の音が聞こえる。

気持ちよくてずっとこのままでいたい。なあ、なんて……／＼。

「椿、俺はお前のものだから……」

それだけ言つとバツと拓夢は離れて、走って帰ってしまった。

よく分からないけど嫌な予感がして……でもずっと此処に立っているわけにもいかないの、

家の中に入ろうとした時、コートのポケットに違和感を感じた。

(これって、さっきの時……?)

中であつたのは杜鵑草だった。

次の日、学校に行くと拓夢はいなくて

先生が一言「拓夢が親の事情で転校した」とだけ言っていた。

(何で?そんなの聴いてないよ?)
涙なんてでなかった。

5年も前の事だけど、昨日の事のように感じる。

あの黒い眼は今、何を写しているのだろう。少し長めでまっすぐな
髪の毛は

今も変わらないのだろうか。

「拓夢、自分が私のもんって言ったよね……」

ねえ、私もずっと拓夢のものなんだよ……」

誰に話しかけるでもない言葉が、むなしく消えてゆく。

「新しい彼氏もつくってないんだよ?告白も全部断ってるんだから・
・

早く、帰って来てよ……」

頬をつたうあたたかきもの。毎年、毎年。

一年で一日だけ涙をながす日。

びんぽーん。

チャイムの音

(もう、誰よこんな時間に……)

両親は用事を出かけているため、自分以外に出る人はいない。

「はーい」

玄關の先に立っていたのは
5年前とあまり変わらない姿の

「た・・く・む？」

杜鵑草の 花言葉は

『永遠にあなたのもの』

第三本 〱 杜鵑草 〱 (後書き)

久しぶりに、新しいの書きました。
此処まで読んでくれたみなさま、本当に
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0335e/>

花言葉は

2010年10月9日22時42分発行